

GCOE ワーキングペーパー

次世代研究 108

満洲移民における引揚げと親密圏の再編成

——戦後日本社会への再定着を中心に

猪股 祐介

(京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)

2013 年 2 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

1. 本論文の目的

本報告の目的は、満洲移民引揚者の戦後開拓における再集団化が、岐阜県郡上村開拓団を事例として、戦前の青年団運動と戦後の婦人会活動の連続性に基づいていたことを、明らかにすることである。

郡上村開拓団は郡上郡（現郡上市）から吉林省舒蘭県（現舒蘭市）へ送出された全〇戸の分郷移民である。敗戦後引揚げた 64 戸が、同郡高鷲村蛭ヶ野（現郡上市高鷲町ひるがの）の戦後開拓に身を投じた。旧郡上村開拓団の団長・副団長が、蛭ヶ野（大日）地区の開拓農協の長を務めた。この社会的地位の継承は、郡上村開拓団の再集団化に一定の役割を果たした。

しかし本報告で注目するのは、戦前の青年団活動が、戦後婦人会における生活改善運動に継承されたことである。郡上郡青年団の社会運動は、凌霜塾という青年道場を建設し、最終的には郡上村開拓団送出へ収斂した。だがその過程では、1930 年代の農本主義と郡上郡八幡町（現郡上市八幡町）の仏教信仰に基づく、農民生活の合理化を目指す社会運動があった。これが「満洲での理想郷建設」に動員されたのち、引揚げの混乱を経て、戦後開拓の婦人会運動で再生されたことを、本報告の第一の目的としたい。なお、蛭ヶ野開拓の婦人会活動に注目するのは、資料的理由からである。大日婦人会会誌『りんどう』が 19 年より年まで刊行され、その全てが保存されている。蛭ヶ野開拓の社会運動を『りんどう』を通じて辿ることとする。そして蛭ヶ野開拓の「成功」は、1960 年代までの窮乏期を、「凌霜精神」に基づく婦人会の生活改善運動等を通じた公共圏の成立にあったことを示すことが、本報告の第二の目的である。

2. 先行研究の検討

満洲移民の戦後開拓における再集団化に関する先行研究には、蘭（1994）、北崎（2009）、伊藤（2006）等がある。以下では三者を中心に検討する。

蘭（1994）は満洲移民の戦後開拓における再集団化を扱った先駆的研究である。蘭は熊本県東陽開拓団を事例として、戦後の東陽開拓団の再集団化を「満洲体験のなかで培われた『きずな』と「集団への共属意識」に求めている。また開拓農協の社会関係を分析し、開拓団長の「満洲での卓越したリーダーシップ」が、在満時の社会関係の維持に繋がったと指摘する。そして戦後開拓における近隣集落との軋轢が、「満洲体験のきずな」「集団意識」「団長のリーダーシップ」を強化したという。東陽開拓団は引揚時の「運命共同体」から戦後開拓の「開拓共同体」へ移行したと見取図を描く。これらの点は郡上村開拓団の大日開拓農協の再集団化にびたりと重なる（注 1）。ただこれらは全て非日常的経験である。「満洲体験のきずな」は一回性である。「集団意識」や「団長のリーダーシップ」は、戦後開拓の節目で動員され、離農者をつなぎ止めたと考えられる。ただその求心力は限定的であったと思われる。本報告の事例である大日開拓農協では、婦人会による生活改善運動等の社会活動を記録する会報が残されている。戦後開拓初期の日常実践を知る貴重な資料で

ある。それと同時に、1952年という困窮状態の最中であって、婦人会誌が発行されていた意味は大きい。なぜ大日婦人会は、食糧難に喘ぎながらも会報を刷ったのか。その問いの答えにこそ、満洲移民が再集団化し得た理由がある。本報告では、戦前の青年団運動から婦人会に継承された、農村生活の合理化を目指す公共圏の構築にその答えを求める。

北崎（2009）は伊藤（2006）により徹底的に批判されているので、簡潔に検討する。北崎は加藤完治の農本主義が、戦後開拓という持続可能な農業を実現させたという。具体的には、日本国民高等学校卒業生が戦後開拓の幹部となったことや、加藤が組合長を務めた茨城県白河報徳開拓組合（以下報徳組合）の「成功」を挙げる。前者は戦後卒業生の入植先が茨城県に集中していることから、これをもって加藤の農本主義が次世代に受け継がれたというのは無理がある。また後者は後述の伊藤による、加藤の農業指導は報徳組合で悉く失敗に終わったという見解が有力である。本報告においても、戦前の青年団運動の農本主義が、戦後の婦人会活動に貫かれたという立場をとらない。青年団活動の農村生活の合理化が、戦後民主主義を経由して、生活改善運動等に再生されたことを示す。

伊藤（2006）は加藤完治の報徳組合の農業指導が失敗に終わったことを明らかにしたうえで、「ミクロレベルにおいて師弟関係を結んだ『農業教育者』としての完治を救い出すこと」を指摘する。加藤の農本主義の理念と農業指導の現実の齟齬を、教え子は教育実践として受け止めたという。具体的には、報徳組合の離農者が定着者の二倍半に及びながら、加藤の教え子である離農者は「教育としての開拓」という価値観を共有したこと、この価値観の共有こそが報徳組合の成功の理由と指摘する。本報告の事例である郡上村開拓団は、戦前より「教育としての開拓」を全面に掲げ、引揚後蛭ヶ野入植後も、その価値観を共有していたことが窺える。しかし加藤完治は、「満洲開拓の父」と称される特異な人物であり、教え子の間の「教育としての開拓」という価値観の共有も特異な事例である。満洲移民の戦後開拓における再集団化において、加藤完治の「農業教育者」として果たした役割は限定的と考えられる。そこで本報告では、価値観の共有よりも、戦前青年団と戦後婦人会に共通する農村生活の合理化の実践を、大日開拓農協が1960年代まで比較的離農者を出さなかった理由として注目する。農村生活の合理化こそが、加藤完治の薫陶を受けていない、多くの満洲移民の再集団化にあてはまるのではないだろうか。

以上まとめれば、本報告は、満洲移民の戦後開拓における再集団化について、先行研究が「満洲体験」や「教育としての開拓」という主に「意識」の共有に着目してきたのに対して、岐阜県郡上村開拓団を事例として、農村生活の合理化という「実践」の共有に着目する。そして、その実践が、戦後開拓という過酷な生活環境にあって、個人化しやすい集団をつなぎとめる、公共圏を構築していたことを明らかにする。まず戦前の郡上郡青年団運動が、1930年代の農本主義の影響下に、道場教育と開墾を通じて、農村生活の合理化を目指す運動であったこと、その運動が満洲移民事業に絡め取られた過程を検討する。次に、引揚後の旧郡上村開拓団の一部が、団長・副団長とともに蛭ヶ野へ入植する経緯を確認したうえで、大日婦人会誌『りんどう』より婦人会活動について、1960年代以前を中心に検討

する。最後に結論として、戦後開拓の婦人会活動が生んだ公共圏の可能性と限界を検討する。

3. 戦前の郡上郡青年団運動

1930年代の郡上郡青年団運動と郡上村開拓団送出については、中道（1991）に詳しい。以下、これをもとに、青年団運動から凌霜塾建設、郡上村開拓団送出の経緯を要約する。そののち、凌霜塾の道場教育と戦前の蛭ヶ野開拓について分析する。

岐阜県は満洲移民送出数 12,308 人（開拓団 9,629 人、義勇隊 2,679 人）で、全国第 7 位である。うち郡上郡は 3,198 人（開拓団 3,016 人、義勇隊 182 人）であり、岐阜県随一の移民送出郡であり、開拓団のみならば 31%を占める。これは郡上郡青年団が青年修養道場凌霜塾を建設し、その道場教育を中心とする青年団運動が「大陸郡上村建設」を牽引したからである。凌霜塾建設の背景に、農山漁村経済更生計画（以下更生計画）と農民道場の流行がある。以下、綱沢（1970=1994）に依りつつ概観する。

農山漁村経済更生計画（以下更生計画）は、満洲国建国の 1932 年より始まった。斎藤内閣は五一五事件、血盟団事件等、世界恐慌（1929）後の農村恐慌に憤る青年将校の蹶起に、強い危機感を抱いた。そこで更生計画が立てられた。農林省は 32 年府県庁に対して「之（＝農村恐慌克服—引用者注）が為には農村部落に於ける固有の美風たる隣保共助の精神を活用し、其の経済生活の上に之を徹底せしめ、以て農山漁村に於ける産業又経済の計画的組織的刷新を企図せざるべからず」との訓令を出した。このように更生計画は「経済更生は先ず精神更生から」という標語のもと、財政出動を殆ど伴わない、農村の隣保共助の精神や組織刷新で恐慌克服を図るものであった。ここに農村組織の一つ青年団も組み込まれた。

とき同じくして、「農民道場」の流行があった。農民道場の嚆矢は、1927 年に茨城県友部に設立された日本国民高等学校である。その創立者・指導者が加藤完治であった。加藤完治は 1931 年の満洲事変後、満洲移民推進の日本側のリーダーとなり、日本国民高等学校はやがて義勇隊開拓団の訓練施設となる。話を農民道場に戻すと、その流行には、「明治末期より大正期にかけて、暗記と試験による受動的教育、すなわち教育と生活の分離、知育偏重などへの批判をもってはじまった新教育運動」との類似性が挙げられる。国民高等学校は、「農場、寄宿舎、教室などをすべて心身鍛錬の場とみなし、職員、生徒は寝食を共にする、いわば大家族としての雰囲気」を作った。この農業教育と生活の一致、農作業等を通じた実践教育が、「受動的教育」に代わるものとして期待された。

凌霜塾の建設運動は、このような社会状況を背景に、1934 年末より始まった。凌霜塾は凌霜隊に因んだものである。凌霜隊は郡上藩により会津藩支援の為に派遣された。白虎隊とともに会津若松城で戦った。会津落城後は、敗残兵として護送された。郡上藩は凌霜隊を脱走兵として処理した。凌霜塾はこの歴史に埋もれた「郷土の義人」の顕彰と郡上発展を目的に建設された。郡上発展の具体的方法はその建設趣意書に見出せる。以下に一部抜粋する。

五、郷土を出でて活躍せらるる先輩並びに郡上若人との連絡親睦を一層密とし、第二、第三のよりよき「郡上町村」の内外各地に建設されんことを熱望するが為に、

六、(省略)

七、己むを得ずして郷土を去らんとする次男三男の就職紹介、海外発展思想の啓培、移民教育の発達により郡上若人たるの名を辱しめざる決意を促し「青年郡上」の精華を天下に轟かせんが為に、(後略)(郡上町史資料編編纂委員会、2006)

郡上郡は林野が総面積の9割を占めていた。『岐阜県統計書』(1937)によれば、農家耕地所有状況は、5反未満が約65%、5反以上1町歩未満が約24%で、1町歩未満が9割近いことが分かる。次男三男や女子の多くは、岐阜市や名古屋市等の都市圏への出稼ぎを余儀なくされた。凌霜塾建設は寄付によって賄われた。その86.5%が郡外の出身者からの寄付であった。凌霜塾建設のきっかけは、農村青年の八幡町の観光地化・都市化への強い反発があったとされる。だが、それを後押ししたのは、凌霜隊遺児の陸軍将校であり、郡外で立身出世を遂げた名士であった。このため「第二第三の郡上町村」建設や「海外発展思想の啓培」が目的に掲げられた。ここに後に満洲移民送出を送出する素地があった。

凌霜塾での教育は『凌霜塾概要』に窺える。特に「塾生指導」の項目に、凌霜塾が「農民道場の流行」の一端にあったことが出ている。以下に引用する。

塾生指導

(一) 迂遠なる教室講義をすて晴耕雨読実習体験を主とし、あらゆる教科はそれを通じて日本精神の精華凌霜魂体得発揚の一点に集注す

(二) 終生生活を通じて拝み働き学ぶ事を無上の楽しみとする人格を陶冶し、黙して働く裡に大自然の無言の教訓を受けんとする敬虔心を培養す

(三) 個性尊重特殊能力の発揮により適材適職を選べしめ、業務を通じて皇運扶翼せんとする熱意を養う

(四) 惜陰好学の態度を馴致し、最短時間に最大能率をあげ得る自学自習に重点を置く。
(郡上町史資料編編纂委員会、2006)

(一)は「受動的教育」ではなく「実習体験」を通じた教育が謳われる。凌霜魂は、塾頭楠章考案の「ナニクソ、オカゲサマ」の精神である。楠は八幡町の浄土真宗大谷派の安養寺の次男として生まれ、早稲田大学を卒業した地方エリートであった。八幡町は浄土真宗の盛んな町であった。「ナニクソ」は堅忍不拔の大和魂、「オカゲサマ」は報恩謝徳の仏教精神であり、凌霜魂は両者の融合とされた。ゆえに(二)で「働き学ぶ」に「拝み」が加えられている。(三)は凌霜塾が皇国思想と無縁で無かったことを物語る。注目すべきは(四)である。「最短時間に最大能率をあげ得る」と目的合理性の追求が掲げられ、その手

段として「自学自習」を挙げる。諸個人が、自ら合理性を追求し陶冶する主体となることが要請される。これは実習体験教育とワンセットである。すなわち、凌霜塾の教育とは、教員や教材からではなく実習を通じて自ら学び、自発的に目的合理性を追求する主体を育てることに他ならない。具体的な塾の一日は以下の通りである。

塾の一日

朝午前五時起床朝食前の活動に重きを置き左の行事を行う

- 1 佛前行事 凝念 勤行
- 2 神前行事 駄足 乾布摩擦 体操 遥拝
- 3 日の出作業 美化作業動物飼育
- 4 早天教練 養浩 機敏舗業
- 5 国漢 英語 商業算術等を短時間授業す

日中午前九時より午後五時まで作業配当により先実習に服す

- 1 内務、青年団、塾堂建設事務
- 2 教務、塾生指導に関する事務、図書館事務
- 3 炊事、調理、台所整務
- 4 青年の店勤務 販売実習
- 5 開墾及農場作業
- 6 農場当番 残飯貰いによる家畜飼育
- 7 委託作業 郡牛舎所属牧場管理、梅林経営管理

夕 就寝午後十時

- 1 青年学校夜学
- 2 諸当番記録 一人一日感想
- 3 夜の行事 佛前参拝 神宮遥拝 家庭へ挨拶 (郡上町史資料編纂委員会、2006)

ここで注目すべきは、朝の5にあるように講義が極めて短く、日中午前 9 時から午後 5 時まで 8 時間と実習が長いことである。また夜の行事の「一人一日感想」は、塾生一人ひとりに 1 日の生活の感想を發表させるものである。自己による内省と生活管理の徹底が求められた。塾生は高等小学校卒業であった。彼らにとって「一人一日感想」は悩みの種であり、また新鮮な経験であった。

凌霜塾は郷土産業の開発については、以下のような計画を持っていた。

郷土産業の開発

- 1 緬羊郡上の建設
- 2 空地利用開墾実習
- 3 廃物利用

- 4 速成栽培の研究 凌霜西瓜
- 5 副業指導
ホームспан俱樂部
自家用味噌醬油
郡上漬物の研究
- 6 陸稻栽培
- 7 ラミー栽培（堀越畑）
- 8 薬草栽培（郡上は薬草豊富）（郡上町史資料編纂委員会、2006）

いずれも郡上郡の狭い耕地に適応すべく考案されたものであった。ラミーは苧麻である。綿羊やラミーによる繊維業に活路を見出そうとしていた。また2の開墾は、日中戦争（1937）以降の食糧事情の悪化にともない、実行に移された。郡上郡高鷲村蛭ヶ野の大日道場建設である。『凌霜塾概要』には以下のようにある。

昭和十五（一九四〇）年五月十二日郡上の発端飛驒の国と国境を接する高鷲村大日嶽の東麓海拔九〇〇米に蛭ヶ野高原に大陸発展後母村農業再編成高原開発の研究調査山沢文化の創造促進による地方農山村人材発見育英指導等を目的とする大日道場建設を発願し鍬入式挙行（郡上町史資料編纂委員会、2006）。

大日道場の道場長は凌霜塾幹部の福手豊丸が務めた。太平洋戦争（1941）の翌年、農林省は東海三県に馬鈴薯増産を命じた。郡内各町村からの開墾奉仕隊、学徒奉仕隊、農兵隊が動員された。推計 15,000 人が動員されたが、種の 3 倍の収穫しか上がらなかった（福手、2001）。

4. 戦後の婦人会活動

郡上村開拓団は敗戦後、ハルピンを経て長春で越冬し、1946 年 7 月八幡町に帰郷した。10 月集計によれば、団員 825 名中、生還者 340 名、死亡者 344 名、未帰還者 41 名、未復員者 71 名であった。死亡者は全体の約 4 割に達した。引揚後、団員の多くは、高鷲村蛭ヶ野、白鳥町那留（現郡上市）、北海道新冠村の戦後開拓に身を投じた。うち蛭ヶ野には最多の 64 世帯が入植した。生還者の過半数が蛭ヶ野へ入植した（岐阜県開拓自興会、1977）。蛭ヶ野が選ばれた大きな理由は、大日道場があったからである。また元団員は、郡内に一箇所に入植したいという強い要望があった。団長山下勘治は全国開拓自興会の要職を歴任し、東京に詰めた。留守を預かったのが、副団長辻村徳松と福手豊丸であった。福手は入植地の地元地権者との交渉に当たった。福手はその様子を以下のように記す。

当時、岐阜県下でも最貧寒なくらいの村で二千町歩の土地買収は驚天動地に大騒動事で、

関係部落では日夜、反対の集会が開かれ、遂に村挙げての開拓反対村民大会が開催された。そうした度に、私は開拓者代表として、県の係官と共に法廷へと拘引される被疑者よろしく出席させられた。県の係官は、占領軍の命令であるからと言って、虎の威を借りて用地買収に応ずるよう説得できたが、私は「どこの〇〇は、あそこに〇〇畝しかない。それまでも買収するのは…」という気持ちと、反面「背後には多くの難民が控えているし…」という気持ちが交錯して、地主に対してはひたすら哀願する立場で終始努めた(山下、1995)。

県の係官の居丈高な態度は、緊急開拓事業(1945)があった。農林省は食糧難と失業者に対する緊急事業として実施した。入植地は旧軍用地や高冷地等、悪条件の未墾地であった。復員軍人・引揚者の帰農が図られた。満洲移民引揚者の半数、約3,000戸(7.5万人)が入植した。翌46年には、第二次農地改革に組み込まれ、強制買収が可能となっていた。

蛭ヶ野には、大日開拓農協が結成された。開拓農協は1974年の開拓農政の一般農政への移行まで、一般農協とは異なる組織系統に置かれた。大日婦人会は開拓農協の下部組織として結成された。大日婦人会会誌『りんどう』の創刊は、入植から7年目を迎えた1952年のことであった。創刊号は農業婦人としての矜持に漲っている。以下に一部抜粋する。

今迄の封建的な暗い いたましい農村 特に牛馬にも劣った農村婦人の姿から文字通り明るい楽しい農村 発らつ明朗な農村婦人 一言にして言えば 「乳と蜜の流れる文化農村」建設の大きな原動力は皆様の手に即ち民主的な婦人会の発展にあると思います(『りんどう』創刊号(1952)5頁)

「乳と蜜の流れる里」は賀川豊彦によって戦前流布した聖書の一節である。副団長辻村は戦前満洲において、戦後蛭ヶ野において、事あるごとにこの一節を口にしたという。辻村は出征した団長に代わり、開拓団を引揚げへ導いた。福手によれば、この「乳と蜜」は物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさを目指す思いが込められているという(福手、2001)。

小家畜経営の参加

此の間 かえり見まするに 何一つ目に見へる仕事も致さず毎日尊い日を茫然と過して本当に組合長さんを始め各組合員の方々に申訳ないと存じます 然し幸いにして今年より組合事業として三ヶ年計画がたてられ 主人は勿論私達婦人もいろいろと研究をして此の難局を打開すべく努力致さなければなりません。それには幸に私共の組では養鶏組合が発足しましたので これを婦人の手でなんとかうまく育て上げなければならぬと存じます(『りんどう』2号(1953)13頁)。

酪農における婦人の主体的役割

今後開拓地に理想の新酪農村建設にも 婦人の力が大きく期待されて居ります。家畜の飼育に、管理に 又は経済面の打開策に 各自の研究に 体験に 意見の交換などが大きな課題になるわけです。

多忙な日常生活の中にも読む（見る）書く（聞く）話す（発表）事などが婦人に必要な三要素となるのではないのでしょうか。今大きく叫ばれている生活の改善も様は、衣・食・住の改善に依って 合理的な方法により 少しでも婦人の就労時間を短縮して 我々婦人に必要な三要素を吸収されるのが大きな目的であると思います（『りんどう』3号（1954）8頁）。

開拓地の現状

開拓の苦難はこれほど苦しいものとは知らず、嫁して七年来る年も来る年も本年こそはと汗と涙で苦しい生活をして、いつまでもこんな事でどうなる事か不安な気になるのも幾度かありましたが組の皆様方の協力のお陰でもう一意気 本年こそは笑って汗を拭はねばなりません。長い間の食料の苦しき、私達女性には一番つらい事です。と云ってもこんな苦しきは私だけでしょうが（『りんどう』4号（1955）5頁）。

待望の電気も導入され入植以来の私達の夢も少しづつ実を結ぼうとしつつあります。長い間の原始的な生活とも別れ少くとも電灯とラヂオのある文化生活が出来る事になったわけです。今までの様にランプの下の生活では、生活の向上とか、合理化とか いくらさげられても何故か現実的な感じが致しませんでした。今日ようやく現代に生きる人間と云う実感が致します（『りんどう』7号（1958）15頁）。

家計簿による自己管理

（前略）今度は丁度「りんどう」にのせて頂けばなくすることもなく又今まで家計簿をつけて見えます方にも見えない人にも何か御参考になりましたらと考えました。この記事をよせさせて頂きました。（中略）生活を合理化する実行する決意が大切です。家計をあずかる主婦にとり赤字程悲しいものはありませんか。今年こそ黒字家計をと、つけ始めた家計簿はどうなっていますか...（『りんどう』4号（1955）16頁）。

乳牛導入と農村生活の合理化

作物もそうですけれど牛ほど敏感で、一寸した手入れや食物の良否も乳にすぐ現われてくるのでなまかわも出来ない反面 楽しみも大きいわけです 一日の働きがすぐ現われて来る様なもので、毎日毎日牛と共にこまめに時間通り、きちんきちんと外の仕事まで出来るようになり、大へん時間を無駄なく使うようになれます。

牛によって時間の大切さを教えられました（『りんどう』8号（1959）9頁）。

農業収入（牛乳代と仔牛代）に対し、農業支出（飼料、乳牛管理費、肥料、サイロ、及び畜舎改造費等）は 56%かかって居ります。その差引残高と家計支出がほぼ同じでどうやら赤字にならずに済んでおりました。

家計支出の面では、支出の一番多い月は、12月、11月で、少い月は、6、7月となって居ります。大体毎年こんな傾向になっているようです。支出の一番多い費目は食費（主食副食共）で 40%弱、主食だけでは 22%となって居り、更にその中でも米代は 14%しかかかっていないのです。米代を支払う時は、つらい思いをしますので、何とか一反歩も水田を作って、自給出来たらいいだろうなど考える事もありましたが、こうして数字で出てみると、この位の割でしかかからないのなら、手間もないのに、これ以上経営を複雑にしない方がいいかも知れないと、思い直した次第です（『りんどう』9号（1960）6頁）。

一番淋しく感じた事は教育費のあまりにも少ない事です。

此れでは親も子ども時代後れになって仕舞さうです。それから私の家では自分初めよく医者にかかりますので保健費の多い事。これは大日開拓の一番だろうとちょっといやな気分ですが医療費より交通費の方が多くかかるのですから、不便と不経済はついて廻っている様です。ここで蛭ヶ野にも診察所が有ったなら、まず一ヶ月に 500 円は我が家の家計簿に黒字が出て来る筈です。色々考へ乍ら眺めておりますと他家では、どんな風に計画を樹てて生活をして見えるか知らと、思いちょっと覗いて見たい気持です（『りんどう』10号（1961）29-30頁）。

凌霜塾の残響

（前略）私は塾生活の映響（ママ引用者注）か家庭を持ったら蛭ヶ野か満州の様な新しい土地で自分達の思う様な理想の村を立て そこで婦人はホームスパンの研究をして 新天地独特の物をつくったらどんなに楽しい生活が出来るかと 思つて希望に胸をふくらませてみた事もあったのに（中略）

乳も出る卵もとれる 文化村

借金をかえして今日も元気なり（『りんどう』5号（1956）9頁）

郡上の人親切でおとなしいと言はれる元はどこにあるのでせう 昔から仏教が栄えている所だからです。その基を棄てたら何が残るでせう。それこそガラガラの田舎者だけです...今や酪農えとまっしぐらに進みつつ ある時此の求道心を併行して進めていったらどんなにすばらしい村創りが出来ることとせう

酪農も婦人でなければいけないと言われている。求道心もとうてい婦人でなければ燃え上がらせられません。こんなに大きな仕事私達婦人に与えられているとは何とは甲斐のある人生でせう（『りんどう』6号（1957）4頁）。

結論

本論文では、戦前の郡上郡青年団運動と蛭ヶ野戦後開拓の婦人会活動を分析した。青年団運動は 1930 年代の更生計画と農民道場の流行を背景に、1934 年に凌霜塾を創設した。凌霜塾は郡上の郡外への発展（国内・海外）を掲げた。それは凌霜塾建設運動を経済的に支えたのが、郡外の出身者名士であったからである。凌霜塾での教育は、実習教育と自己管理を特徴とした。また郡上郡の振興策として、緬羊やラミーによる繊維業と開墾を二本柱とした。開墾は同郡高鷲村蛭ヶ野の大日道場として実現した。凌霜塾は教育と開発によって、農民生活の合理化を図った。だが、総動員体制下、満洲移民事業や食糧増産事業に組み込まれ、農民道場としての性格を次第に失っていった。

郡上村開拓団は生還者の過半数にあたる 64 世帯が、蛭ヶ野へ入植した。入植地買収にあたっては、地元住民の激しい反発を受けた。大日道場の存在と元団員の郡内一箇所入植の強い希望から、蛭ヶ野へ入植した。ここに大日開拓農協が結成された。しかし 1946 年の入植から 1960 年代まで、離農者が相次いだ。蛭ヶ野は標高 900m の高冷地にあった。また湿地帯とナラ・アカマツ等の雑灌木の密生地からなる、農耕不適地であった。手開墾は捗らない。開墾に対して 4 割の補助金が出たが、それでは生計が成立しない。結果現金収入を得るため出稼ぎに出て、開墾が疎かになるという悪循環に陥っていた。ドッジの緊縮予算（1949）や戦後開拓事業の失業者・引揚者に対する社会政策から、地元次男三男に対する農業政策への転換（1950）により、入植地のインフラ整備は遅れた。蛭ヶ野の電気導入は 1954 年のことであった。

そうしたなか、大日婦人会は婦人の農業参加や生活改善を通して、農村生活の合理化を図ろうとした。会誌『りんどう』は 1952 年に創刊された。会誌を通して、「民主的な」農村婦人が生活改善の知恵を共有する公共圏が構築された。まず農村婦人がペンを執ること自体が民主的であった。次に小家畜経営に積極的に関わった。旧来の受動的主体でなく、読む・書く・話す主体であるという意識に目覚めた。会誌『りんどう』はその実践の場であった。そして家計簿等の自己管理により農村生活の合理化を図った。乳牛導入後は正確な時間観念、各頭への細やかな配慮が求められると自己認識するに至る。現実には、電気導入までランプ生活を強いられたように暗いものであった。それを振り払うために、副団長辻村徳松の「乳と蜜の流れる里」が、『りんどう』の公共圏で繰り返し語られた。『りんどう』の公共圏は暗い現実を抗する、農村女性のささやかな、それでいて確かな意思を以て築かれた居場所であった。

戦前凌霜塾の実習学習と自己管理は、戦後婦人会の農業参加と自己管理と、農村生活の合理化という点で重なる。しかし決定的に異なることは、前者の公共圏が官製であったのに対し、後者の『りんどう』の公共圏が民主化により能動的主体となった女性によって担われていた点である。『りんどう』は開拓農協解散後も号を重ね、1995 年まで続いた。他方で『りんどう』の女性が、戦後開拓行政に大きく規定されていたことも忘れてはならない。ドッジ緊縮財政や開墾から土地改良への政策転換の中で、開拓農民は財政支援乏しい開拓

を強いられた。それを乗り越えるに、婦人の労働力化・家計管理が動員された側面は否定できない。ただそれでも、食糧難のなかペンを執り、書く主体となった女性の目覚めを評価すべきではないだろうか。戦前青年団は更生計画や郡外名士がお膳立てした公共圏で活動した結果、「理想郷」を目指しながら満洲侵略へ突き進んだ。これに対して、戦後婦人会は自らが公共圏を構築することで、「理想郷」に向けての着実な歩みを進めた。

文献

蘭信三（1994）『「満洲移民」の歴史社会学』行路社。

伊藤淳史（2006）「戦後開拓における加藤完治の営農指導：入植者の反応の着目して」『村落社会研究』13(1): 25-33。

北崎幸之助（2009）『戦後開拓地と加藤完治：持続可能な農業の源流』農林統計出版。

岐阜県開拓自興会（1977）『岐阜県満洲開拓史』同会。

郡上町史資料編編纂委員会（2006）『郡上八幡町史史料編』同会。

大日婦人会（1952—1961）『りんどう』1号—11号（岐阜県郡上市所蔵）。

岐阜県開拓自興会（1977）『岐阜県満洲開拓史』同会。

中道寿一（1991）『ヒトラーユーゲントがやってきた』南窓社。

網沢満昭（1970）『日本の農本主義』紀伊国屋書店＝（1994）『日本の農本主義』紀伊国屋書店

福手豊丸（2001）『回想ひるがの』私家版。

山下求（1995）『拓いて八十八 山下勤治米寿記念誌』私家版。

2010年度次世代研究「満洲移民における引揚げと親密圏の再編成—戦後日本社会への再定着を中心に」（研究代表：猪股祐介）による成果である。

【メンバー】（ ）内は2010年度プロジェクト時点

猪股 祐介（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）